HEART’s

ディーコンファイラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＥＡＲＴ’ｓ

【Ｎコード】
Ｎ７７１５Ｊ

【作者名】
ディーコンファイラー

【あらすじ】
めんどくさい事が嫌いな、高校生　松上銀
一つの指輪がきっかけで彼の人生は変わっていく
主人公最強……？

松上　銀　～希代のお馬鹿～（前書き）

「さて、どんな奴が拾ってくれるかな」

男が箱を置いた

未知の力が詰まった箱を…

松上　銀　～希代のお馬鹿～

こんにちわ

ディーコンファイラーです

はじめまして０（＾－＾）０

この「ＨＥＡＲＴ，ｓ」が

私の人生で

初めて書く作品です

誤字、脱字

読みづらいところが

多々あると思いますが

多めに見ていただけると

嬉しいです（＊＿＊）

ヘタクソなので

まともな小説が
書けているのか
分かりませんが
楽しんで頂けるよう
頑張りますｐ（＾＾）ｑ

応援よろしく
お願いいたしますｍ（＿）ｍ
ちなみに
更新は出来だけ
早めに出来るよう
頑張りますので
できれば多少多めに
見ていただければ
ありがたいですｆ＾＿＾；
ＡＭ８：２０

「やべ、ガチで間に合わん」

松上　銀（まつがみぎん）

この物語の主人公的存在である

現在、彼は愛車のカウンタック（チャリンコ）で、学校までの道程を疾走している
カウンタックはギシギシと奇怪な音をたてながら物凄いスピードで学校へと進んで行く

彼の通う学校である、石川高等学校は創立２０年のまだまだ歴史の浅い公立高校である
この学校では、生徒は８時３０分迄に登校しなければならない
そのため銀は必死だった

「おっしゃ～、間に合ったんないけぇ」

「オィ、ちょっとまたんか」無事、敷地内に入ることができ、少し安心した矢先、銀の目の前に巨大な壁が出現した

「オハヨーゴザイヤス、センセー…」

「んー、おはよう」

壁の正体は、銀の担任の茂宮(もみや)だった
彼はこの学校の生徒指導部長でもある
身長だけでなく声もとても大きい
銀はとにかく茂宮が苦手だった

「いや～、寒いっすねぇ」

「そうやな」

現在１１月上旬、数日前に雪も降り、季節はすっかり冬である

「やはりわたくし、今日も遅刻なのでしょうか…」

銀は畏まって茂宮に尋ねた
「今日は土曜日や」

「…」

「…」

「ガチですか」

「ガチや」

「ナンテコッタイ☆」
痛い凡ミスである

「まぁ、せっかくやから野球部見てかんか？」

「ケッコーです」

「勿体ない、お前くらいの体格なら絶対のびるんに」

銀は身長１８４、体重７５と、恵まれた体格ながら部活動には所属していない

「キョーミないです」

「そうか」

「サーセン」

銀は自転車のところへトボトボと歩きだした

「部活とか怠いし無理ぽ」

銀は基本的にダラダラと一日を過ごしている

やることがないのではない

やらないのだ

決して運動神経が悪いわけではない
しかし、疲れる事はしたくないという性格である銀、部活動はもちろん、体育すら出席するだけで動こうとはしない

「はぁ、土曜に学校来てしまったとか…マジどんまい、俺」

カウンタックは家までの道程をよろよろと進んで行く

「〜♪〜♪〜♪…ん〜？なんやあれ」

鼻歌混じりに自転車をこいでいると、銀の3メートル程手前に、吸い込まれそうなまでに深い黒色の箱が落ちていた

「なんじゃ、こりゃ」

銀は、自転車から降りると、その黒い箱を拾った

「何入っとるんやろ♪」

銀は、めんどくさい事は嫌いだが、面白そうなものの為には労力を厭わない
開け口を見つけた銀は興味津々な顔でその箱を開いた　「ん〜、指輪やぁ♪」

箱には指輪が入っていた
指輪は箱と同じく黒いものである

「一応もらっとこ♪」

銀は何気なくその指輪を抜き取った

後に、彼の人生を１８０度変える事になるとも知らずに…

松上　銀　～希代のお馬鹿～（後書き）

「拾ったな」

男が呟く

「君は世界を救えるか」

男はそう言うと、どこかへ消えていった

誘拐…？（前書き）

もうそろそろ本題に入りまーす

誘拐…？

「綺麗な指輪やな～」

しばらく指輪を眺める銀

手元に指輪があれば当然……

「せっかくやしはめてみようかな」

こうなる

「おぉ〜、いいねいいね♪」

最初のうちは良かった

ここで、銀が急に焦り出す

「あれ……取れん！」

指輪が抜けなくなってしまったのだ

「ど〜しよ〜」

焦る銀

「とにかく指輪を抜かんとヤバイ」

銀が必死に指輪を抜こうと引っ張る

「ん〜っ…」

ズポッ

なんとか指輪が抜けた

「ふぅ〜、あぶねあぶね…」

指輪が取れたので、ようやく帰ることができる

そう思ったのもつかの間

「オイ、坊主」

後ろから声が聞こえた

「オイ、聞こえねぇのか」

「めんどいし早く帰ろ♪」

マイペースな銀

「オイ！無視するな！」

「はぁ～、何ですか？」

銀は、いかにもめんどくさそうな表情で声がする方に振り向いた

すると、いかにもガラの悪そうな、３０歳くらいの、スキンヘッドの男がこちらを睨んでいた

「何なんですか」

銀が言う

スキンヘッドは怒りの表情を浮かべていたが、一旦、怒りを抑え、銀に話し掛ける

「なぁ…黒い指輪を知らねぇか」

「それが何か」

スキンヘッドの口元がわずかに綻ぶ

「大人しく俺についてこい」

「何でですか?……もしかして誘拐かなんかですか!?」

銀はキラキラした目でスキンヘッドを見た

「…なぁ…坊主…俺はイライラしてんだ、早く来ないと…」

「さっきから坊主坊主って…どっちかと言えばあんたの方が坊主でしょ？あ、坊主って言うかハゲとるな…」

ピキッ

「…もういい…やめだ…

ぶっ殺してやる！！」

スキンヘッドがキレた

「そんな汚い言葉を使ってはいけないとお父さんかお母さんに習わなかったんですか」

あくまでもマイペースな銀

「殺す！！！」
そう言ってスキンヘッドは右手を大きく広げる
すると、スキンヘッドの手から突如、炎が現れた

「熱くないんですか？」

銀はマイペースさを存分に発揮する

「黙れっ！！！！」

銀のマイペース過ぎる発言で、さらにキレたスキンヘッドは、物凄いスピードで突進してきた

「えぇぇぇぇ！？」

スキンヘッドは炎を纏った拳で銀に殴り掛かる

「死ねぇ！！！！！」

「いや、無理…」

銀は咄嗟の事で避けることが出来ず、目をつぶった

「…あれ？」

何秒待っても痛みが来ない

銀は恐る恐る目を開いた
そこには、凍り漬けになったスキンヘッドがいた

「な…な…」

「なんじゃこりゃ〜！？」

トンッ

「あ…」

バタッ

銀はいきなり首に攻撃を受け、簡単に意識を手放した

誘拐…？（後書き）

「本当にダメな人ですね」

「すいません」

「私が止めなければどうなっていたことか…」

「で、でも…あいつが…俺のことハゲって言…」

「ハゲじゃないですか」

「はい…」

「全く…

さて、もうそろそろ彼も目をさます頃ですかね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7715j/

HEART’s

2010年12月20日02時13分発行